JABMEE 13年度

建築設備技術遺産 ⑤

不凍水抜き栓

管理者＝小樽歴史館

不凍水抜き栓は、日露戦争後、満州から伝わったとされており、日本独自の器具として住宅や設備の変化とともに研究開発されてきた。

昭和中期には水使用個所は台所１カ所だけであったが、その後、洗面所、風呂など複数個所に増え、それに適した構造の水抜き栓が開発された。さらに、２、３階への直接給水可能な抵抗の少ないもの、また、水と湯の両方に対応させたものなど、住宅設備の変化にあわせて進化してきている。

今回申請のあった不凍水抜き栓は、1950年から60年ごろに使われた光式耐寒不凍給水栓、55年から70年ごろに使われた光式不凍給水栓（貯留式）、2002年以降に使われている湯水抜き栓である。住宅および住宅設備の変化と時代背景にあわせた水抜き栓の変遷を示すものであり、現物であること、公共施設に展示してあることも評価できる。

（おわり）

日刊 建設通信新聞　2013.8.13